書評・紹介

兵藤一夫著『般若経釈　現観荘厳論の研究』

磯田熙文

本論は、ガンデン寺第二代管長ダルマリンチェン（Rgyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432）の、（ハリバドラ作）『現観荘厳論註（小註）』に対する複註『註釈、心髄荘厳』を主資料として、『現観荘厳論』の実践論体系（八現観・七十義）の内容を概説することを目的として著作された。

全体は序論（四節）、

第一章　般若経と『現観荘厳論』（三節）、

第二章　『現観荘厳論』概説（二節）、

第三章　『註釈、心髄荘厳』の和訳（序説と摂義の部分）

付篇（四節）よりなる。付篇は、

1『註釈、心髄荘厳』科文、

2『現観荘厳論』「根本偈」テキスト、

3『註釈、心髄荘厳』チベット語テキスト（序論と摂義の部分）、

4『現観荘厳論』諸註釈の八句義・七十義諸版ページ対照表の四篇、いずれも信頼度の高い資料を附して便宜に供している。

序論　第一節の『現観荘厳論』とその著作

ハリバドラ（Haribhadra, Seṅ (ge) bzaṅ (po)、八世紀後半）の注釈書の序偈に、恐らく文献上初めて、「現観本論の著者・弥勒、注釈者・無著、世観、聖解脱軍（Ārya Vimuktasena）、大徳解脱軍（Bhadanta Vimuktasena）、ハリバドラ」の系譜が挙げられている。しかし、現存の最古の注釈書は聖解脱軍の『二万五千頌般若註釈（Ñi (khri) snaṅ (ba)）』であり、従来、現観本論の著作はこの聖解脱軍に大きく関わる事柄とされている。著者も、後述の三智説などにも視点を置いて、「アーリヤ＝ヴィムクティセーナに近い人物（彼の師）であろう〔六世紀—七世紀初め頃までの成立〕」（五頁）と結論づけている。

「弥勒著作説」は、これまでのところ、文献上、ハリバドラ以前に遡って見出せないとしても、弥勒作とする限り、「弥勒—無著—世親」をセットとし、これに聖解脱軍を継続させて系譜を作ることは不自然ではない。とすれば、矢張り「弥勒作」創説に関わる問題（「弥勒の五大論」も含めて）は般若経文献の変遷・展開の問題と共になお残されている。

第二節　インドにおける註釈文献

プトン（Bu ston, 1290-1364）の『インド仏教史』及び『目録』には、般若経典類の解釈の方軌を、

(1) 弥勒の『現観荘厳論』関係（二十一書）

(2) 龍樹の『根本中頌』を初めとする中観部のもの（百四十六

書）
(3)三門・十一異門で解説するもの（二書）
(4)陳郡が『八千頌般若経』を三十二要義で解釈した『要義（Piṇḍārtha）』関係（三書）

の四種の車軌轍に分け、それぞれ所収の論・註を挙げ、最後にその他としての『般若心経注解』等（十二書）を含めている。

『現観荘厳論』関係の注釈書に関しては、般若経典との関わりで多くの問題が残されているが、[1]著者は先に、ハリバドラに帰せられる『二万五千頌般若経』（テンギュル部所収）の著作者の伝承に疑問を提示された。[2]興味深いことは、この書と玄奘訳『大般若』第二会とが比較的よく合う事実である。『現観荘厳論』の項目が付加されているこの書と別に、『改変版二万五千頌般若経』作成・成立の動きがハリバドラ以前に遡って、例えば七世紀初までに段階的に何らかの形で有りえたかどうかといった幾つかの疑問が生ずる。[3]

第三節　チベットにおける『現観荘厳論』の伝統

第四節　ダルマリンチェンの『註釈、心髄荘厳』について

『現観荘厳論』とハリバドラの『小註』は、特にゲルク派の五教科（中観・律、般若、阿毘達磨、論理）の一つとしての般若学（修道論）の、今日用いられているテキストの所依・基盤をなしていることからも、その重要性が知られるが、この「チベットにおける学的伝統を確立し、それ以後の学習の所依とされるのは」、まさに本書に扱われる「ダルマリンチェン（rGyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432）である」（二十三頁）。

唯、注意すべきことはダルマリンチェンの注解も、「概してインドの伝統を受けていると思われるが、しかし随所にチベット的要素が見られるようである。……インドの註釈との違いの有無を常に念頭におかなければならない」（二十五頁）と、著者が言われる、このことは、他の多種の註釈書類を扱う場合にも心がけておかなければならないことであろう。

流伝後期初期のリンチェンサンポ（Rin chen bzaṅ po, 958-1055）、アティシャ（982-1054）によって伝えられた『現観荘厳論』は、サンプ（Gsaṅ phu）大学問寺の座主も務めたロデンシェラプ（Rṅog Blo ldan śes rab, 1059-1109）の翻訳（改訂）・註釈活動によって、現観・般若学が確立されたが、著者は、カダム派、サキャ派、ゲルク派（新カダム派）の主たる注釈者の伝統・著作を挙げている。ロデンシェラプからプトンまでの二百年程の間にどのような注釈者・注釈書が出、伝えられたかについては、僅かな情報しか伝えられていない。

また、著者が触れる「ツォンカパ（の『Gser phreng』）に対するロントゥン（Ron ston sMra baḥi seng ge chen mo, 1367-1449）の批判、それに対するダルマリンチェンの反論」（二十一頁）などのように、サキャ派とゲルク派の人々との論争は、『現観荘厳論』に止まらぬ大きな研究課題となる。

第一節　三智

著者は、先ず一切智性（sarvajñatā）、道智性（mārgajñatā）、一切相智性（sarvākārajñatā）の三智説が、『二万五千頌（大品）系般若経』に至ってはじめて説かれるに到ったとして、この点に着目し、『大智論』、初期の瑜伽行派の諸論においてはなお一切相（一切種）智と一切智の別が見られても、三智は説かれていないことを指摘し、その上で、この三智を中核に置いて般若経を解釈したところに、『現観荘厳論』の特色と重要性があると結論づける。

最後に、「一切相智」の相（akāra, rnam pa）が、法輪を転ずるという「言語表現すること」に関わる言葉であり、「清浄分別智」に当たるとしていることは注目に値する（三十九、四十四頁）

第二節　『二万五千頌般若経』における道
——道相智を中心にして——

著者は、梶芳光運博士による「一切智から一切種智への展開の契機として、道種智が重要であること」の指摘に注目し、三智の中でも「道（相）智を『大品系般若経』のキーワード」（四十五頁）とみなし、経文の所説に従って三智が般若波羅蜜の実践によって得られることを確かめている。『現観荘厳論』の理解では、「道智は菩薩摩訶薩たちのものであるが、……誓願を成就せず、有情達を成熟させず、仏国土を浄化せずしては、実際を現前化しない」（四十六頁）のであるが、著者の指摘されるように、〝誓願成就〟の項は〝付加〟である、

「未具足仏土。未化衆生。不当受真際覚。」（放光般若経大正八、一一四ａ）

「是菩薩未浄仏土。未成就衆生。是時不応実際作証。」（羅什訳大正八、三七五ｃ）

「諸菩薩摩訶薩。成就有情。厳浄仏土。及修大願。若未円満猶於実際未応證住。若已円満乃於実際応可證住。」（玄奘訳『大般若』第二会大正七、三三七ｂ～ｃ）

「Rab ḥbyor byaṅ chub sems dpaḥ sems dpaḥ chen po des saṅs rgyas kyi shiṅ yoṅs su dag par ma byas śiṅ / sems can rnams yoṅs su smin par ma byas par yaṅ dag paḥi mthaḥ mṅon sum du mi byaḥo //」（『二万五千頌』Toh (D) No. 9, A, $130b^{5-6}$; Ota (P) No. 731, $17a^{8}$-b^{1}）

「smon lam yoṅs su rdsogs par ma byas pa daṅ / saṅs rgyas kyi shiṅ yoṅs su smin par ma byas pa daṅ / sems can yoṅs su dag par ma byas pa de srid du byaṅ chub sems dpaḥ sems dpaḥ chen po de yaṅ dag paḥi mthaḥ mṅon du mi byed do」（テンギュル『二万五千頌』D No. 3790, Ca. 145a1-2 ; P No. 5188, Ca169b6-7）

玄奘訳には確かに〝修大願〟が入っているが、三項目の順序は他のいずれとも異なる。

「⑵三智の獲得」（四十六頁）の項に、Sktとして

「sarvajñatāṃ jñānena darśanena cāvalokyātikramitu-kāmena bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitā

bhāvayitavyā / mārgajñatāṃ paripūrayitukāmena sarvākārajñatām anuprāptukāmena sarvasattvacittacaritajñānākāratāṃ paripūrayitu-kāmena sarvavāsanānusandhikleśānutpāṭayitukāmena bodhisattvena mahāsattvena prajñāpāramitāyāṃ yogaḥ karaṇīyaḥ /」(Dutt, ed, p, 21, ll. 6-10) の和訳を、亦羅什訳を提示している。今、カンギュル部『二万五千頌』の対応経文を引くと、

「rnam pa thams cad mkhyen paḥi ye śes rnam paḥi mchog thams cad daṅ ldan pa mṅon par rdsogs par ḥtshaṅ rgya bar ḥdod pa daṅ / lam gyi rnam pa śes pa daṅ / thams cad śes pa daṅ / sems can thams cad kyi sems daṅ / spyod pa daṅ / śes paḥi rnam paḥi śes pa ñid yoṅs su rdsogs par bya bar ḥdod paḥi byaṅ chab sems dpaḥ sems dpaḥ chen pos śes rab kyi pha rol tu phyin pa la brtson par byaḥo / …」

(D Ka. 28b$^{5\sim}$; P Ga. 31b$^{1\text{-}4}$)[④]（一切相智の知とその一切の最上相を完全に覚ろうと楽い、また道相智と一切智とすべての有情の心・行・知の相智性を円満具足せんと楽う菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に専修すべきである。……）

とあり、Skt とカンギュル部「二万五千頌」では、三智の順序が逆に入れ替り、菩薩にとって一切智は知・見により観察されるべきもの（であって、修習の対象ではない）との解釈が持ち込まれ、改変されていることがわかる。唯、玄奘訳はここではカンギュル部『二万五千頌』に近いが、微妙に異なる。羅什訳は「三智に関連性を持たせた」（四十六頁）羅什独自の理解・解釈であろう。

著者はまた「道相智の役割」の説明を経本文に求め、結論として、

(i) 菩薩決定位（不退転位）の獲得は道相智による。
(ii) 道相智を行ずることによって菩薩である。
(iii) 道相智は一切の道を得ることである、

との三項にまとめている。

第三節　『現観荘厳論』の道の立場

『現観荘厳論』は、その綱格である八句義（dṅos po (padārtha)）、八現観、八章（skabs (prakaraṇa)）、即ち、一切相智性（sarvākārajñatā）、道智性（mārgajñatā）、一切智性（sarvajñatā）、の三智、一切相現等覚（sarvākārābhisaṃbodhaḥ）、項現観（mūrdhābhisamayaḥ）、次第現観（anupūrvābhisamayaḥ）、一刹那現等覚（ekakṣaṇābhisaṃbodhaḥ）の四加行、及び果としての法身（dharmakāyābhisaṃbodhaḥ）という順序で、膨大な（二万五千頌）般若経の内容を区切り、十地・五道などの大乗・菩薩の実践体系の組織を組み込み、その体系に経本の言葉を取り入れつつ作り上げられたものである。同じ実践用語が繰返し処々に用いられ出てくるが、それらが複雑に関わり合って、全体的、有機的な八句義（智の相、道、果）を完成させている。

著者は、これらの中で、例えば修習の次第・階梯としての加行道、見道、修道がいくつかの章（一、二、三、五章）で重層

的に説明されるが、「四種分別（般若波羅蜜修習の所対治分）」を、それらの道をつなぐ重要な項目であるとし、これらを『般若経』と『現観荘厳論』における「空性修習の具体的な内容」をなすものと捉えて、解説する。著者の指摘されるように、核心をなす課題であり、『般若経』との対応のさせ方が注意を要する。〔六十三項四行目〕「(pratyarthikadharmo。)」は（pratyarthikamārādivastū。）であろう。

第二章 『現観荘厳論』概説

第一節 『現観荘厳論』（根本偈）和訳

付篇二『現観荘厳論』（根本偈）に所載のサンスクリット、チベット訳テキストに基づき、『註釈、心髄荘厳』の科文と内容に随って、その全訳を挙げる。著者は、従前の諸学者の翻訳に関する注記をほとんど省いている。これは、『註釈、心髄荘厳』、セラ・ジェツンパの『七十義』に基づいて訳出したこと、煩瑣を嫌われたこともあろうが、著者自身の訳文に対する自負が伺われる。

〔七十七頁下二行〕「父の家系（jāti）の、母の家系（gotra）の、」。『現観本論』では、「(kula) jātyośca gotrasya; (rigs daṅ) rus daṅ cho ḥbraṅ daṅ /」（三八四～五頁）とありハリバドラの『小註』⑤も「6) ādityādy-anvayo. 7) mātrādi-sambandha-jñātiḥ /」と注解するから、著者の訳文の通りで（チベットの伝承では）問題ないが、カンギュル部『二万五千頌』では「rgyud phun sum tshogs pa daṅ / rus phun sum tshogs pa daṅ /」と訳し、漢訳は、

「云何菩薩所生成就。若刹利家生。若婆羅門家生故。云何菩薩姓成就。如過去菩薩所生姓。此中生故。」（羅什訳大正八、二五九b）

「云何菩薩摩訶薩応円満家族具足。善現。若菩薩摩訶薩或生刹帝利大族姓家。或生婆羅門大族姓家。父母真浄。是為菩薩摩訶薩応円満家族具足。

云何菩薩摩訶薩応円満種姓具足。善現。若菩薩摩訶薩常在過去諸菩薩摩訶薩種姓中生。是為菩薩摩訶薩。応円満種姓具足。」（玄奘訳大正七、八八b）

と訳している。経文の上では、父系（jāti）、母系（gotra）に対応させることは難しいように思われる。

〔七十八頁十八行〕「時にあらずして……」（rdsogs smin ma sbyaṅs par du）は、「有情成就の完成を待って」ということであろうか。

第二節 般若波羅蜜と八句義七十義の解説

夙にE・オーベルミラーはチベット仏教におけるこの『現観荘厳論』の重要性を充分に認識し、大乗の諸実践体系が複雑に組み込まれた組織体系とその内容を全体的に把握しようと試み、

(1)ジャムヤンシエパ『八句義七十義』の科文と解説に随い、

(2)対応の『二万五千頌般若』

(3)ハリバドラ『大註』、『小註』

を対応させてまとめ、『アビサマヤの分析』を公表したが、彼

の夭逝により未完に終わっていた。

著者はオーベルミラーの意図を受け継いで本書を著作したと言われているが、資料と内容の上で、前書より一層有用なものとなっている。

『現観荘厳論』の体系・綱格を表わす〝八句義〟の語は論自体に用いられているが、〝七十義〟という語はラトナキールティ、シャンテイパなどの註釈に、（チベット訳による限り、）この語が見られる。しかしそれ以前の註釈とされるものには見られないので、恐らく十世紀以後になって用いられはじめたのであろう。

第三章　『註釈、心髄荘厳』の和訳（序論と摂義の部分）

本章は、初めにハリバドラの『小註』の当該部分（序の部分）の和訳を付す。

（序論と摂義）とはいえ、五十葉を越える量にわたり、また、筆者自身、蔵外文献特有の難解な語句などの本書翻訳にはしばしば刮目させられた。

〔二〇三頁五～七行〕翻訳者によって帰敬の語（saṅs rgyas daṅ byaṅ chub sems dpaḥ thams cad la phyag ḥtshal lo）がしつらえられたのであれば（プトンも触れているが）、『小註』梵本にはこの語が無かったことになる。

〔二〇五頁十五行〕「二万〔五千頌般若〕』の典籍を註釈するところ」は、『Ñi khri gshuṅ ḥgrel（Paddhati）』。著者に関して、Daṃṣṭrasenaか世親かで問題になる。

〔二一二頁十六行〕「中人の意思をなすこと」は、中人の意思の浄化・学習。

〔二一四頁二十一行〕「疑いを除いて」は〔　〕に入れる。

〔二一六頁十六行〕「立てられることになるので（bshag paḥi lag rjes su ḥgyur bas）」のlag rjesは、既得の実績のようなものとなることか（二三六頁十三行では、（智の）役割と訳す）。

〔二二四頁十五行〕「般涅槃していることを」は、般涅槃していることを初めとして。

〔二二八頁九行〕「(mi ldog paḥi chos°）は、（phyir mi ldog paḥi chos°）」。

〔二二九頁一九行〕「恐れを引き出す」は、恐れに出会う（＝二三一頁一二行）。

〔二八五頁⒆〕（ḥchos）と（skyob）とは、「(三蔵により、有煩悩の所化の心から三学を持つものに）改善することと（煩悩の果たる悪趣の有（bhava）の苦より）護ること（『Luṅ gi sñe ma』Toh no. 5137, $4a^{7}$-b^{1}）とも説明される。

付篇1の『註釈、心髄荘厳』科文は、註釈全体の科文及びその和訳よりなる大変な労作であり、研究者に大きな便宜を提供するものである。

本書は、著者の『現観荘厳論』研究に対する熱意と堅実な姿勢によって積み重ねられた綿密な文献研究の成果であり、今後の『現観荘厳論』研究に本格的な一歩を進めたものと言うこと

ができる。

付篇3所収の『註釈、心髄荘厳』（序論と摂義）のテキストを、Toh No. 5433 (T) と比較・照合して、「後注記」にない個所について気付いたものを記す。

p. 428, l. 14. T. (6b^4): bya bas so // for byas so /
429, 27 T. (8a^1): theg pa chen for theg ehen
435, 1. T. (12a^3): skyes pa for skye pa
435, 6. T. (12a^4): ces bya ba for shes bya ba.
435, 24. T. (12b^6): gis for gi
441, 24. T. (18a^6)adds kyi after śer phyin
442, 10. T. (19a^1): chos kyi for chos kyis
443, 11. T. (20a^1): poḥi for po
443, 17. correct sñin to sñiṅ
448, 23. correct da to du
449, 8. correct daḥi to deḥi
449, 22. correct sñed to sñid
452, 28. T. (28b^7): byaḥi for byas baḥi
454, 18. correct snam to sñam (T.30a^7)
456, 1. correct skyo bo to skye bo (T. 31b1)
456, 6. T. (31b^3): rgyal for rgyas
458, 19. T. (33b^4): kyi for kyis
465, 6. correct ga to gi
466, 8. T. (40b^1) omits daṅ before bdun cu
471, 28. correct ziṅ to zin (T.45a^1)
476, 25. T. (48b^7) adds gis after kha cig
478, 13. T. (50a^6) adds lus after bsad pas

注

① 例えば、ハリバドラの二著、『八千頌般若注解（大註）』と『小註』の著作順序の問題に関して、著者は『小註』が後の著作である（二九六頁）とするが、なお、決着はついていない。

② 「Bstan 'gyur 所収の『二万五千頌般若』についての二・三の問題——特に『現観荘厳論』との関連において——」（『日本西蔵学会会報』No. 30）。

③ cf. N. R. Lethcoe,「Some notes on the relationship between the Abhisamayālaṅkāra, the revised Pañcaviṁśatisāhasrikā, and the Chinese translations of the unrevised Pañcaviṁśatisāhasrikā」（『JAOS』vol, 96, pp. 499-511）。

④ 因に『二万八千頌般若』では、
「rnam pa thams cad makhyen paḥi ye śes rnam pa thams cad kyi mchog daṅ ldan pa mṅon par rdsogs par byaṅ chub par ḥdod pa daṅ / lam gyi rnam pa śes pa ñid yoṅs su rdsogs par bya bar ḥdod pa daṅ / thams cad śes pa ñid yoṅs su rdsogs par bya bar ḥdod daṅ / sems can thams cad kyi sems kyi spyod paḥi rnam pa śes par ñid yoṅs su rdsogs par bya bar ḥdod pas śes rab kyi pha rol tu phyin pa la brtson par byaḥo /…」(D. No. 10, Ka. 12b$^{3\text{-}4}$)。

⑤ 天野宏英校訂『ABHISAMAYĀLAṂKĀRA-KĀRIKĀ-ŚĀSTRA-VIVṚTI（梵文、現観荘厳頌論釈)』（平楽寺書店、二〇〇〇年、四五頁四行）